

『他力信仰録』より

3 両親へ

御手紙を度々下さいまして有難うございました。

相変わらず皆々様もお健やかに御辛抱

なさいます由何より結構な事と存じます。

私も恙なく暮らしていますからご安心下さ

い。 八月七日に上京してから一心不乱に勉強する積りでいましたが、十三日に御手紙が参

いくど よ くだ

かんが

かんが

ほど

わたし

しんこう

しん

い

しょもつ

り、幾度も読み下しく 考えれば考える程、私の信仰は信じたと言うのではなく 書物を

知っていたのであったのに驚かずにいられたかったです。直に京都に行つて（当時嵐山に

下宿）お寺に参つて聞きましたけれどもどうしてもどうしても安心できません。嬉しうも無ければ

有難くもない。不安の念が胸一杯に成って心配せずにはいられなくなりました。十四日に

は同封の御手紙を無漏田さんに持って行き、御邪魔に成るとは知りつつも長時間聞かずには

いられず、聞いて理屈がよく判っているながらも胸の不安は解けもせず、聞けば聞く程妄念疑

雲の深い私であると言う事を考えずにはいられなくなりました。私は永年宗学を学ばして

戴きながら人様から尋ねられた時には六字の独働きで往生は一定と言いながら、何故傍

道に踏み迷うて疑う様に成ったのだろうかと苦しい胸を抱いて泣きました。毎日く心配

して食物も進まない程気に掛りましたが、何故心配せずにはおれなかったのか、私自身にも

判らなかったのです。こんな苦しい思いをして気を揉んでも仕方が無いから愉快に楽しく

呑気に成ろうとすれば益々息づまる様な重苦しきで寝ても寝られず起きてても起きられず、死

んだ先の問題を考える暇もなく、安心とか信心とか抽象的な言葉を弄ぶ予猶もなく、百味の

おんじき おうぼう みようふく ゆめみ おも
 飯食や応報の妙服など夢見る思いもなく、
 ただただおしせま いま もんだい
 唯々切迫った今の問題、
 よそ いえ や
 他所の家が焼けているの

ではなく、あんしん安心し切きっていた自分の魂じぶんから燃え上たましいがった業火もは何物あを持って来ごうかても防なにものぎ止もきふせと

める事は出来ませんでした。
初めは、
疑いさえ無くば八万四千の煩惱は見貫いた上の

本願じゃと片付けていましたが、千里の堤が蟻の穴から崩れる様に、疑いさえしなければよ

いいとうたが言こころうなか疑ひぶたいが心きの中ときで火蓋を切った時には、邪魔じやまに成ならないと思おもった八万四千の業煩惱ごうぼんのうが

唸うなりを挙あげて邪魔じやまに成なるのでした。
お話を聞きいてもお聖教しょうぎょうを拝誦はいじゆさして戴いたいても

馬耳東風、蛙の面に水で、靴を隔てて掻いている様で苦しい胸には響きません。仕方が無い

から十七日には印度、志那から日本へと三国伝来のお釈迦様が嵐山にましますのを幸いにお

参まいりして出しゅ離りの要路ようろを伺うかいましたけれども、散乱さんらんする心こころより外ほかに出でませんでした。毎日まいにち

なや
ぬ
よる
ぶつでん
つくえ
うえ
あんち
すべ
しょうぎよう
まえ
お
ひもと

悩み抜いて十九日の夜はお仏殿を机の上に安置し、総てのお聖教を前に置いて繙いてみ

ますけれども何^{なん}ともありませんでした。「歎^{たん}異^い鈔^{しょう}の講^{こう}和^わ」を讀^よんでも「凡^{ぼん}夫^ぶそのま^ま」を讀^よ

んでも 焼^やけ石^{いし}に水^{みず}を掛^かける様^{よう}なものでさっぱり受^う付^けてくれませんでした。電^{でん}灯^{とう}も消^けし

てしまつて、今^{こん}晩^{ばん}は悶^{もん}死^ししても苦^く惱^{のう}の心^{こころ}が晴^はれる迄^{まで}はやめないと進^{すす}みました。判^{わか}らん

ただ わか そ ままこ なおわか おやさま ただ い なぜ わたし くる

く 唯^{ただ}が判^{わか}らん。其^{その}の儘^{まま}来^きいよが猶^{なほ}判^{わか}らん。親^{おや}様^{さま}は唯^{ただ}と言^いいながら 何^{なん}故^ごこ^こんなに私^{わたし}を苦^{くる}し

めるのでございますか。 現^{げん}在^{ざい}法^{ぽう}龍^{りゆう}は苦^くしい張^はり裂^さける様^{よう}な渦^{うず}巻^まく心^{こころ}で泣^ないているのに何^{なぜ}故^ご

救^{すく}うて下^{くだ}さらないのですかと 遂^{つい}には御^み仏^{ほとけ}を怨^{うら}み呪^{のろ}いました。 其^{その}時^{とき}の心^{こころ}の中^{なか}の悩^{のう}乱^{らん}は

一通^{ひととおり}りで無^ないにも関^かわらず 底^{そこ}の心^{こころ}は平^{へい}氣^きで「てれっ」としているのに驚^{おどろ}きました。 嗚^あ呼^あ

どうしよう!! この心^{こころ}が「はい」と返^{へん}事^じをしないから苦^{くる}しいのだ。 何^{なん}故^ご周^あ章^あててくれない

か。 何^{なん}故^ご驚^{おどろ}いてくれないか。 鞭^{むち}打^{うち}てば打^{うち}つ程^{ほど}「きよろん」としているので泣^なきました。 其^{その}

時^{とき}無^む常^{じょう}の虎^この絵^えを思^{おも}い出^だし、尊^{とう}い妙^{みょう}法^{ほう}を耳^{みみ}にしなが^ら、姿^{すがた}は僧^{そう}侶^{りょ}に成^なりなが^ら、業^{ごう}流^{りゅう}転^{てん}を続^{つづ}

けて来た此の不実の魂が言う事聞いてくれない為に再び迷わねばならんがどうしよう、今
命が絶たれたらどうしようと思う時、天地が覆った様な、無間のどん底へ投込まれた様
な、（実地通らねば判らない）ぎりぎり舞いして「わー」と泣き伏した儘!! 唯ぞ!! の
勅命! 声なき声、唯と言うのは此の儘か!、泣き崩れた儘が唯であつたのか。 自分で
はどうにもこうにも成れないと投げた儘が 本願の儘に成れたとは不思議じゃなあ。 親様
すみません赦して下さい。 罪の有りたけ、障りの有りたけ、煩惱具足の有りたけで本願の
白道の上を歩いていたのでありましたか。 嗚呼何たる広大な慈悲かと踊り上がって泣き
ました。

お母さん 私は今の今迄御仏様を死物の様に思い、遠い処に待っていて下さる様に思つて
いましたが、 現に今私の煮え返る心の中に生きていて下さると言う事は知りませんでし
た。 本願の真実を見ようと思えば 毎日毎時猛り狂う私の心を見れば一番よく判るのでし

た。底そこの知しれない不実ふじつに泣なけば泣なく程ほど 本願名号ほんがんみょうごうの力強ちからつよさが判わかるのでした。清きいに成なって

安心あんしんしてと思おもうのが 皆自力みなじりきであつて 安心あんしんし切きらない心こころが救すくわれた時ときに大安だいあんしん心するるのであ

りました。私わたしの一念いちねん一刹那いつせつなに起おこる妄念もうねんも悉ことごとく南無阿弥陀仏なむあみだぶつと共に動とも うごいているのでございま

す。欲よくが起おこります、よく承知しょうちの上うへじや、腹はらが立たちます、愚痴ぐちが零こぼれます、それが本願ほんがんに契かな

うていのであるぞ、と仰おつしやるのだから逃にげ場ばが有ありません。私わたしのこのまんま罪業ざいごうの持もち合せ

のなりを親おやに任まかすのでありました。墮おちる世話せわもいらないうが上あがる世話せわもいりません。善ぜんも

欲ほしからず悪あくも恐おそれなしとは如何どうした威神いじんりき力でございましょう。

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 大悲だいひの御親みおやの御催おんもよおしにより泉いずみが溢あふれる様ように流ながれ出でます。念仏ねんぶつ

するなと言いわれても称となえずにはいられません。

無慚無愧むざんむぎのこの身みにて まことの心こころはなけれども

弥陀みだの廻向えこうのみ名ななれば

功德くどくは十方じつぽうに満ち給たまう

この不思議ふしぎな親心おやごころを知らして下さくだったのは 勿論もちろん阿弥陀如来あみだによらいさま様の御念力ごねんりきではございますけ

れども、この御本願ごほんがんを聞きかせる様ように導みちびいて下さくだったのは御両親ごりょうしんの御恵みおめぐでございます。なに

おれい い

ふしぎ

よろこ

から御礼を言いってよいやら、ただ不思議 く と喜んでいます。

親子おやこの間あいだには訳わけも理屈りくつも無い、只苦ただくを苦くと知しらない私わたしが可愛かわいいばかりでああったのでした。

す

あやま は

ねんぶつ

いままで

たにんほとけ

よう

ああ済みませなんだ く 謝り果ててはお念仏するだけであります。今迄は他人仏の様に

思おもって私わたしの心こころを繕つくろうていましたが 親おやの本願ほんがんの邪魔じゃまをしていました。阿弥陀様あみださまは永劫ようごうの手柄てがら

を私わたしにさしてくれよと仰おつしやるのに 今迄強請いままですねていたのでございました。 今日きょうという今日きょうは付つ

き纏まとわれて仕方しかたが無いなから、念仏ねんぶつは極樂ごくらくに生るうまる種たねにてやはんべるらん、又また地獄じごくに墮おつる業ごうにてやはんべるやん、どちらがどうか知しり切きらないけれども身みも心こころも差さし上げました。助たすかったのやら墮おちたのやら、取とったのやら取とられたのやら、称となえるのやら称となえさされるのやら、唯々ただただ南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏なむあみだぶつの声こえばかりでございます。

十三日から十九日まで苦くるしみ抜ぬいて、藻搔もがき抜ぬいて、どうにもこうにも持もちも携さげもならず、この魂たましいを凝視みつめて泣なき崩くずれたなりが、誓願せいがん一仏乗いちぶつじょうの正客しやうきやくであつたとは、道理どうり理屈りくつを超ちようえつ越つず、ふしぎ ほか いま しやかさま れい まい おうらい せんべん

して不思議 く の他はありません。今からお釈迦様にお礼に詣ります。往来八千遍の

御苦勞ごくろうは私わたしひとりひとりに今日きようの歡喜かんぎを与あたえる為ためでございましたか。本願寺ほんがんじの親様おやさまにも御真影ごしんえいにもがっこう こうどう ほとけさま わたし しょうじるてん あいだいちど ねんりき そそ ようや ほんごくかえ

学校の講堂のみ仏様にも、私が生死流轉のその間一度は く の念力を注いで、漸く本国帰

る身^みにさして下^{くだ}さった御礼^{おれい}に参^{まい}ります。

嗚呼^{ああ}重荷^{おもに}は下^おりて今日^{きょう}の飲^{よろこ}び、法龍^{ほうりゅう}の一切^{いっさい}の無明^{むみょう}の闇^{やみ}は晴^はれ、法龍^{ほうりゅう}一切^{いっさい}の志願^{しがん}は満足^{まんぞく}さ

れ十方^{ぼうほうかい}法界^{もら}を貫^{こうだいなんし}った広大^{よろこ}難思^{ようこ}の飲^{よろこ}びがあるのに、私^{わたし}一人^{ひとり}を生^いかす為^{ため}に無量^{むりょう}永劫^{ようごう}骨身^{ほねみ}を碎^{くだ}

き、十劫^{じゅう}已来^{いらい}血汐^{ちしお}を流^{なが}して立^たち続^{つづ}け泣^なき続^{つづ}けられた親様^{おやさま}はどんなに喜^{よろこ}びでがざいましよ

うか。私^{わたし}を祖師^{そし}聖人^{しょうにん}様^{さま}をお慕^{した}い申^{もう}す真^{しん}の仏弟子^{ぶつでし}に成^なれよと導^{みちび}いて下^{くだ}さったお母^{かあ}さんが、

学問^{がくもん}や智慧^{ちえ}で得^えられない他力^{たうりき}不思議^{ふしぎ}の信仰^{しんこう}に生^いきたと聞^きかれたら、どんなにお慶^{よろこ}びに成^なるで

しょうか。嗚呼^{ああ}お母様^{かあさま}は善知識^{ぜんちしき}、私^{わたし}を生^いかす為^{ため}に諸有^{あらず}苦患^{くげん}を身^みに受^うけて、私^{わたし}に先立^{さきだ}って泣^な

き、私^{わたし}に後^{おく}れて喜^{よろこ}ぶ法蔵^{ほうぞう}菩薩^{ぼさつ}の御化身^{ごけしん}でございます。

南無^{なむ}阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ} 南無^{なむ}阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}、身^みも心^{こころ}も南無^{なむ}阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}、行住坐臥^{ぎょうじゅうざが}が南無^{なむ}阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}、死^しん

だ先^{さき}の往生^{おうじょう}も嬉^{うれ}しいが、現^{げん}在^{ざい}から光^{こう}明^{みょう}の広海^{こうかい}に遊^{あそ}ばして戴^{いた}だいてい^{こと}る事^{こと}が猶^な嬉^{うれ}しゅうござい

ます。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨を砕きても謝すべし

お母様！ この信念を獲さして貰った上からは、骨は砕けても喉は破れても一切の衆生を

生かさずにはいられません。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。合掌。